

無化される自然

—Emerson と世界のかかわり—

井崎 浩*

Elimination of Nature:

R. W. Emerson's Way of Dealing with The World

Hiroshi IZAKI

Synopsis

Emerson's basic strategy for dealing with the world around him is to ignore its physical features and only focus on the extreme spiritual aspect. In this sense, nature as "things" that exist is completely eliminated. Its method is applied to consider human beings. In *Representative Men*, for example, Emerson reduces human beings to the symbolic existence of the spiritual meanings and he only considers human beings in relation to the spirit; in short, human beings that exist are also eliminated. When his way of interpreting the world is examined in contrast to Walt Whitman, his contemporary poet, its extremeness is even more clarified.

第一章 無化される自然

Emersonにとって自然とは、単なる物理的存在なのではなく、あくまでも精神的なものとの関連において捉えられるべき存在であった。そのことは、たとえば *Nature* の中で、"Nature is the symbol of spirit."¹と語る彼の言葉に典型的にあらわれている。こうした自然観をもつ Emerson であれば、自然を眺め、考察しようとする場合に、そのアプローチの仕方がかなり特異なものとなることも、当然の結果であると言える。同じ *Nature* の中に次のような一節がある。

Standing on the bare ground, —my head bathed by the blith air and uplifted into infinite space,—all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God².

Emerson が、自然の本質と彼が考えたものに至り、「普

遍的存在」とか「神」といったものを認識するに至るには、このように、単に自己を無にするのみではなく、一個の「透明な眼球」になる必要があったというのは、彼の自然に対する態度を考える上での重要な手がかりとなるはずだ。なぜ他の感覚器官は無視されているのか。また、なぜ眼球には"transparent"という形容詞が付されねばならなかったのか。まずこうした点から Emerson の考えを探っていきたい。

D. H. Lawrence によれば、視覚は全ての感覚のうち最も非官能的なものだという。"Sight is the least sensual of all the senses."³とすれば、精神的"spiritual"なものを求めようとする Emerson にとって、嗅覚や触覚といった、自然の事物そのものの実在を感じさせるような感覚は全く邪魔にしかならないものであったのだ。ものがものとしての重みを持ち、それぞれの特性ある匂いとか肌ざわりを持っていたのでは、その背後にある精神的な実在へ至る前に、ものの実在感が堅固な壁のように立ち塞がることになる。Emerson の言うものの「輪郭と表面」⁴が流動することなく、もの自身が絶対的、究極的な存在としてとどまってしまうわけだ。

* 教養部

平成 8 年 9 月 27 日受理

だからこそ Emerson は、“sensual”な感覚器官を捨て、最も非官能的な、つまり“spiritual”なものに最も近い視覚を通してのみ、自然を捉えようとするのである。音もなく匂いもせず、味も肌ざわりも、さらにそのもの自体の物理的な重ささえ感じることなく、ただ視ることのみ終始された対象物が、いかにたやすく空霊なものとなって解体されてしまうかは想像するに難しくないであろう。Emerson が自然にアプローチを試みる時、視覚のみをその手段としたのは、単に好みの問題ではなく、自然を“transcend”するために慎重に選ばれた戦術だったのである。

そして Emerson の戦術は、さらに「視る」ということをも“transcend”する方向へと進んでいる。いかに視覚が非官能的であるとはいえ、感覚の一つとしての視覚にとどまるかぎり、ものの固有の形態や色彩などに惑わされて、自然が真に意味するものへの飛翔をなおも妨げるかもしれないのだ。それゆえ、そうした感覚としての視覚を超越するために、Emerson は眼球に“transparent”という形容詞を冠したのである。つまり肉体の一部としての眼球ではなく、他の箇所で行うところの「理性の目 (the eye of Reason)⁵」, 「内なる目 (the inward eye)⁶」としての視覚であることを示したわけだ。

このようにして Emerson は彼の言う「悟性」、つまり「ものの表面しか見ることのできない能力」⁷を巧みに超越し、「感覚を超えたものを洞察できる認識能力」⁸である「理性」でもって自然を視るという地点に到達することができた。以上のことを考えてみれば、Emerson が霊的な世界のことを、“The kingdom of man over nature, which cometh not with observation”⁹と呼んだ理由も、もはや明らかであろう。他の感覚はもちろんのこと、最も“spiritual”な感覚である視覚でさえ、自然の真の意味を探るには不適切なのである。いかなる感覚を用いても、そこには必ずやもの自体のごつごつした実在感が残ってしまう。Emerson にとって、そうした、もの自体の実在感はなく邪魔なものでしかないのである。「透明な眼球になる」と言うときの彼の狙いは、自分の信じる精神的実在への到達のために、自然そのものの存在を完全に捨て去ってしまうことにあると言ってよいのだ。こうして自然のかなたにある根源的な存在へと達した Emerson の世界では、実は自然そのものは徹底的な「非在」にさらされている。ただ、精神、霊といった空霊なるものだけが存在するのだ。

自然に対する Emerson のこのような態度は *Nature* 第3章の「美」に関する部分でさらに徹底して展開されている。ここで彼は自然の形態そのものの美を賞讃することからはじめるのだが、その直後に“this beauty of Nature which is seen and felt as beauty, is the least part.”¹⁰と述べ、“The presence of a higher, namely, of the spiritual element is essential to its perfection.”¹¹と続けるのである。そして結論のところでは、次のように述べて自然の美を、いとも簡単に越えていってしまうのだ。

But beauty in nature is not ultimate. It is the herald of inward and eternal beauty, and is not alone a solid and satisfactory good. It must stand as a part, and not as yet the last or highest expression of the final cause of Nature.¹²

つまり自然の美は決して“solid”な実体をもったものではないと言うのだ。この言葉は、さきほどの「見られたり感じられたりする」自然の美を「とるに足らぬ」として価値を減じてしまうことから、もっと進んで、その実在をも否定しているものとして受け取ることができる。Emerson が自然の美に見ようとするのは、彼が「究極的な根源」と呼ぶ、やはり空霊な存在だけなのだと言える。

こうなれば「精神」の「自然 (=もの)」に対する優位は明瞭だ。とすれば、対等の関係ではない以上、Emerson の目的が、酒本雅之氏が言うように「両者の和合の成就」¹³であるとは考えられない。「和合」というときの二者間に想定される対等の関係は、Emerson の「精神」と「もの」との間には完全に欠落していると見る方が正しいはずだ。「精神」のみが実在であり、「もの」は非在である以上、両者に懸橋をわたすことは不可能である。ここまで、つまり「もの」の実在を完全に否定するところまで突き進んできた Emerson に残されている唯一の道は、あたかも実在しているかのように見える（と彼が考える）「もの」を悟性の迷妄だとして徹底的に否定し、全てを「精神」の実在でおおってしまうことしかないのだ。かくして世界は「精神」のみが存在するものへとさらに徹底して改変されていくことになる。

そうした徹底した一元化を達成するために Emerson のとったさらなる戦術は、次の日記の一節にあらわであろう。

……各人は絶えず自分の性格の力に応じて、彼の外的な境遇を内的な素質に適応させようと努力する。もし外的な境遇がどうしても適応しようとしなければ、彼は現在の生活様式を打破して、彼の素質に適応するような新しい生活様式を始める。(1832年1月30日)¹⁴

彼は、「外的な境遇」(酒本氏の訳によれば「外界の条件」)をそれが彼の世界観に合致しないならば、無理にでも「内的な素質」(同「内面の本性」)に適合させると言うのである。また *Nature* の第6章には、さらに強い調子で同様のことが述べられている。

By a few strokes he the poet delineates, as on air, the sun, the mountain, the camp, the city, the hero, the maiden, not different from what we know them, but only lifted from the ground and afloat before the eye. He unfixes the land and the sea, makes them revolve around the axis of his primary thought, and disposes them anew. Possessed himself by a heroic passion, he uses matter as symbols of it. The sensual man conforms thoughts to things; the poet conforms things to his thoughts. The one esteems nature as rooted and fast; the other, as fluid, and impresses his being thereon. To him, the refractory world is ductile and flexible; he invests dust and stones with humanity, and makes them the words of the Reason.¹⁵

ここで詩人と呼ばれているのは、「感覚的な人間」と対比されていることからみて、Emersonの言う「理性」でもってものを視る人間のことだろう。その詩人は、陸や海といった自然を「土台から引き離し」自然の「思想を軸として」それに「新しい位置を与える」という。つまりは「ものを想念に一致させる」とあるように、まわりの世界を自己の思想と合致するかたちに変えてしまうわけだ。田宮正晴氏の言葉を借りれば、「自己の精神を中心として自然界を再編成した」¹⁶のだ。

ここまで突き進んでしまったEmersonにとって、もはや自然＝ものは存在しないと言っていいだろう。彼の、ものを精神に無理やりにでも合致させようとするやり方には、ものと精神との間の激しいぶつかり合いなどどこにもない。ただ論理や観察を越えて仮定された精神の優位という思想がものに対して一方的な猛威をふるっている

だけである。精神だけが実体である以上、ものが実体として存在することは許されない。ものは彼の思想のままに改変され精神によっておおいつくされ、ついには、ものとしての存在自体を完全に消されてしまう。Emersonの思想の中では、自然は無化されてしまっているのだ。

一方の極であるはずのものが実在しないとなれば、世界にはもう一方の極である精神のみが存在することになる。そうすれば、酒本氏の言う「世界の奥ゆき」¹⁷など、どこにもありはしないのだ。ものがあり、その奥に精神があるという立体的な構造でEmersonの世界をとらえることはできない。そうした立体性を持つためには、ものも実在であることが認められる必要があるはずだからだ。しかし、Emersonは今まで見てきたように徹底してものの実在を否定し、無理やりにでも改変し、最終的には無化してしまう。とすれば、Emersonの世界は「世界を対等の相手として認めない想像力の専横」¹⁸によって完全に一元化されてしまった平面的なものだと言わざるをえない。F. O. Matthiessenが“the object is lost in the thought”¹⁹と述べているのは、この辺りの事情を指していることであろう。

これは世界を解明しようというEmersonのひたむきさが生み出した極北の地点であるのかもしれない。しかし、そこに19世紀のアメリカン・ロマンティズムの生んだ極端なナルシズムの実例を見ることもできはしないだろうか。

第二章 ものの重み

この章では、さきほどEmersonの思想を、“the object is lost in the thought”だと指摘したMatthiessenが逆に“the thought is lost in the object”と指摘するWhitmanとの比較においてEmersonにおけるものの重みということを考えてみたい。

Emersonが肉体を軽視していたことは酒本氏も指摘している通りだが、²⁰Whitmanは対照的に肉体をほとんど神聖視し崇拝さえしている。彼の最高傑作“Song of Myself”には次のような表現がみられる。

The scent of these arm-ptis aroma finer than prayer,
This head more than churches, bibles, and all the creeds.

If I worship one thing more than another it shall be

the spread of my own body, or any part of it,²¹

また“I Sing the Body Electric”という詩のセクション9には、肉体が細部にいたるまで凝縮と列挙されており、Whitman がいかに肉体そのものに関心を寄せていたかがうかがわれる。またこの詩でも、“Song of Myself”同様に肉体の聖性を“The man's body is sacred and the woman's body is sacred.”²²と大らかに讃美するのである。

Whitman が Emerson と同じく超絶主義的な思想を持っていたことは確かである。彼の“soul”は時空を簡単に超越し、縦横無尽にこの世界を、そして宇宙を飛びまわる。そうした“soul”が彼にとって至高の存在であるのは自明の理だ。

しかし Whitman はこの soul と先ほどみた body を同様の立場において眺めようとするのである。“Song of Myself”のセクション48では、“I have said that the soul is not more than the body, / And I have said that the body is not more than the soul”²³と謳われており、明らかに霊と肉体の同等性を宣言しているのだ。しかもここで言う肉体が、決して抽象的なものでないことは、“I Sing the Body Electric”の例でみた肉体細部にまでわたる Whitman の関心によくあらわれている。これはなにも2, 3の詩にだけみられる思想ではなく、少数の例をのぞいてほぼ全ての Whitman の詩に現れるものであり、Whitman の中心的な思想の一つでさえあるのだ。

そして霊が言うまでもなく精神的な存在であり肉体が物質的存在であることを考えれば、soul=body という対等の図式を、精神=ものという別の対等の図式に置き換えることも十分可能なはずである。

とすれば Whitman の世界には、たとえ精神的なものに傾きがちであったとしても、物質的なものも、確固とした実体として捉えられているということになる。つまり、ものはものとしての実在をもっているのだ。Emerson のようにものを無化してしまっ、世界を精神的なものへと一元化してしまおうとする志向は Whitman にはほとんどみられない。ものも精神も両者ともに、Whitman にとって実在のものであり、この世界で屹立して存在しているのだ。

だからこそ Whitman は“I help myself to material and immaterial”²⁴とか“Materialism first and last imbuing”²⁵といった言葉を何の屈託もなく発することができるのだ。

Whitman はまた、周囲の世界のあらゆるものに没入するというかたちで物質的な世界との交流をおこなう。“Song of Myself”では怪我人、病人、女性、逃亡奴隷、救助船の船長、老砲兵手といった、人種、性別、階級などとは全く無関係なかたちで、実に多様な人間たちに没入していくし、“There Was a Child Went Forth”では、“the first object he look'd upon, that object he became, / And that object became part of him”²⁶とあるように、さまざまな動物や植物、ひいては、町や村に至るまで、それこそあらゆるものになるのだ。

これは言わば、もの（=物質的存在）が霊という精神的存在に侵入されていることになるかもしれない。だが精神的侵入を受けても、ものは他の何かに、つまり精神的存在になりかわってしまうことなく、もの自体としての存在が変化するわけではない。Emerson の場合のように、ものが精神におおわれてしまい、無化されてしまうのとは明確な対照をなしている。

それでは Whitman が、一遍の詩を最終的に精神的な光でおおってしまうとする試みをおこなっていると思われる“Song of the Open Road”の場合に、果たしてものがどのようなありようを示しているかを見てみよう。

この詩は「大道」についての具体的ないしは抽象的な思索を通して、結局は自己の想像力のはたらきを謳ったものだと言えるだろう。そしてその思索の中心となっている大道は、詩の終り近くで次のように強い精神的な光があてられる。

To know the universe itself as a road, as many
roads, as roads for traveling souls.

All parts away for the progress of souls,
All religion, all solid things, arts, governments—all
that was or is apparent upon this globe or any
globe, falls into niches and corners before the
procession of souls along the grand roads of
the universe.

Of the progress of the souls of men and women along
the grand roads of the universe, all other
progress is the needed emblem and suste-
nance.²⁷

この詩行からうかがわれる詩人の意図は、大道そのもの

のを精神的なものへと昇華させることで、詩全体を一つのアレゴリーにしてしまおうとするものと言えるだろう。

だが、その意図が果たして首尾よく成功しているのかという点に関しては、疑問符を付けざるを得ない。なぜなら、この詩をアレゴリーとして成り立たせるために最も重要な、大道を精神的なものに昇華させることが詩人の思う通りには、読者に納得されないからだ。端的に言って、この詩を前半部で謳われる大道は、あまりにもものとしての実在感が強いのである。

例えばセクション2では、この大道を通過したであろうさまざまな人間たちのことが、カタログ式に並べられるし、セクション3では、“paths worn in the irregular hollows by the roadsides”²⁸といった非常に具体的な道の描写をはじめ、大道の周囲の建物の細部にわたるカタログが展開され、セクション4では、“The cheerful voice of the public road, the gay fresh sentiment of the road”²⁹と大道でくりひろげられるにぎわいまでが描かれる。

こうした詩行の周囲には、詩人の想像力の縦横な活動がみられ、決して地上に制約された感じではないのだが、それでもこの大道はあくまでも、人間の実生活と分かち難く結びついた、実体を備えた道であるとの印象は拭えない。それゆえ、その大道を一気に宇宙の魂の大道にまで想像力をもって浮き上がらせても“The earth never tires, / The earth is rude,…”³⁰というごつごつした大地に結びついた大道というイメージは払拭されず、アレゴリーとしては、はなはだ不徹底にものに終わってしまうわけだ。

なぜこのような結果になるかと言えば、もちろん Whitman が、Emerson の“transparent eyeball”といった戦術を用いることなく、ものそのものと渡り合ってしまうからだ。これほどまでに Whitman の世界は一元的なものとはほど遠いのである。Whitman にとってのものは、たとえ精神の侵入を受けようとも、その重みを失うことのない存在なのだ。

Emerson の場合、精神的な面の特に強い、“Brahma”という詩の中では、ものの重みなど完全に失われている。Matthiessen は、すべては精神の中で無化されている、と次のように述べている。

...all the severing details of man's existence, all the distinctions between shadow and sunlight, between ...

life and death, are caught up and reconciled and obliterated in the sweep of the divine mind.³¹

それでは、「彼が自分の思想に奉仕するよりも、眼前の事物にとらえられる瞬間に、つまり彼が思想家であるよりも、詩人になった瞬間に歌い上げた詩」³²とされている“Rhodora”の場合にはどうであろうか。

前半部分は確かに“the simple perception of natural forms is a delight”³³とも述べた Emerson の言葉を裏付けるかのように、素直な感動が謳われているようにも見える。しかし、Matthiessen は次のような鋭い指摘をおこなっている。

...the glimpse is not developed and is hardly reinforced by any of the other senses, by the sounds and smells and touch that would have added body to the sharp airiness of the vision.³⁴

実はここにも Emerson の「見る」ことに限定するという戦術は生きていたのである。鳥や花に“body”を与えるようなものは注意深く避けられている。だからここで描かれる鳥も花も「空霊な」ものとしか感じられないのだ。そう言えば、まるで「あの世」のものとしか思えないほど現実の重みに欠けている。

そうすると最後のステップを踏むのはあまりにも簡単だ。大文字の“Power”という、精神的な存在を暗示する語が最終行に持ち出されるだけで、この詩の世界は一気に精神によっておおいつくされる。花も鳥も、ものとしての重みを一切持たぬがゆえに、やすやすと精神的な存在へと飛翔してしまうのだ。

ものと精神両方の実在を認め、しかもまるごと手放して肯定するという、決して論理的な統一性はもたぬものの、実に立体的な世界観を構築した Whitman との比較を通して、Emerson の世界観がいかに平面的で一元化されつくしているかが、さらに明らかになったのではないだろうか。次の第三章では、さらに歩みを進めて、彼の人間観にまで踏み込んでみたい。

第三章 無化される人間

Emerson が自己の想念に合わせて自然を改変してしまう性向を持っていることは、すでに第一章で指摘した通りである。そして彼の言う自然が *Nature* の序章にあるごとく、人工的なものまで含むものであることを考え

れば、ものを想念に適合させてしまおうとする意図が、彼の周囲のあらゆるものに及んでいくことは当然の結果である。

このことがはなはだしいかたちで露出しているのが、“Compensation”である。「償い」とは世界が必然的な二元性によって、一方の極が大きくなりすぎれば、もう一方の極が縮小されるというふうにより合いを保っていることを言う。このような思想が、現実におこっている不幸や災難や悪に対して何らの効力も持たぬのは当然だが、問題は、Emerson がなぜ、これほど平板な思想を持ち得たのか、という点にある。

彼はこのエッセイの中で、まことしやかにいくつかの例をひいて彼の思想を立証しようとしている。闇と光、熱と冷、潮と干満、雄と雌……。世界の中にこうした二元性を思わせるものはあまた存在しているだろうが、また一方で二元的なものに還元しえぬものも数限りなく存在しているはずだ。Emerson が誠実に世界を見つめていれば、後者を見逃せるわけではない。とすれば明らかに Emerson は、自分の「償い」と言う思想にとって都合のよい部分だけを採り上げて論じている。都合の悪い部分は簡単に排除してしまっているのだ。

自分の思想に合わぬ部分は除外し、都合の良いところしか見なかったことが、このエッセイの弛緩してしまった原因である。確かに極端な例ではあるのだが、それだけにかえて Emerson の世界に対する姿勢をよく物語っていると言えるだろう。Nature の中でも、Nature in a sea of forms radically alike and even unique. A leaf, a sunbeam, a landscape, the ocean, make an analogous impression on the mind.³⁵ といった一節があるが、世界が「似たような印象」を与えるのも、上と同じ理由からであろう。つまり、そう見える部分しか、またはそのようにしか見ないのだから当然である。

そしてこのような態度は、Emerson が人間存在について考えるときにも微妙に影響しているようにさえ思われる。彼が人間について考えるとき、果たして何を見、何を見ていないのだろうか。

Emerson 思想の根幹をなす“Self-Reliance”の根拠は、自己の内面に宿る「共通の根源」つまりは神である。自己の内に普遍者が存在するとなれば、どんな外界の権威にも従う必要はない。ひたすら内面の声に従いさえすればよいからだ。

とすれば、実は「自己信頼」とは、個人としての自己そのものを信頼するのではなく、自己の内面に宿る普遍者

を信頼するということにほかならない。だから Emerson が1840年4月7日の日記で、「自分のすべての講演で、自分は一つの教義、すなわち個人は無限である、ということをおしえた」³⁶と言うときの個人の無限性とは、内部に宿る神を全面的に信頼し、一体となることで、単なる有限の存在から何ものにも制約を受けない無限の神的存在になれることを意味している。Emerson はここに至って、いわゆる神秘主義的な宗教思想に限りなく近づいているが、これによって確かに、個人は何らかの媒介的な存在（例えば教会など）を必要とせず、全くの個人的な営みにおいて神との交渉を持つことができる。社会的・因襲的なものとのこうした隔絶ゆえに Emerson は徹底した個人主義者だと言われることになる。

しかし、神秘的な宗教の常ではあるが、そこに大きな逆説が存在することになる。すなわち、Emerson の自己信頼とは、内面の神にのみ従うという点で「自己放棄」とイコールであるという逆説である。“Self-Reliance”に次の一節がある。

We lie in the lap of immense intelligence, which makes us receivers of its truth and organs of its activity. When we discern justice, when we discern truth, we do nothing of ourselves, but allow a passage to its beams.³⁷

“intelligence”とは言うまでもなく神の別名なのだが、神の通路にすぎなくなるまで自己を徹底して空しくすることが Emerson の「自己信頼」の理想であることがわかるだろう。

ここまでなら神秘的宗教思想ということですまされるかもしれないが、Emerson の場合、既成の宗教や社会とあまりにはっきり隔絶していたため、例えば、Yvor Winters などによって、アメリカ思想史における倫理的無政府状態を招来した張本人であると批判を浴びせられることにもなる。³⁸

今の例が極端であるとしても、“Self-Reliance”の中の“these impulses may be from below, not from above.”という知人の疑問は至極もっともなものではないだろうか。内面の声に従うといっても、その声が神の声とは限らないのではないか、というのは、当然考えられる危惧であろう。これに対する Emerson の答は、“if I am the Devil's child, I will live then from the Devil.”であったという。ただし直後に“No law can be sacred to

me but that of my nature”³⁹と付け加えていることからわかるように、Emersonは決して自己の内に悪魔の宿る可能性を考えてはいない。⁴⁰

では、この問題にEmersonはなぜ、ここまできっぱりとした態度を取れるのであろうか。“Self-Reliance”の他の箇所には次のような表現がある。

...let me record day by day my honest thought...and, I cannot doubt, it will be found symmetrical, though I mean it not and see it not.

There will be an agreement in whatever variety of actions, so they be each honest and natural in their hour. For of one will, the action will be harmonious, however unlike they seem.⁴¹

最初の引用の“honest”，2番目の引用の“honest and natural”はともに、内面の声に従うときの条件として付加されているものだろう。内面の声にただ従うのでは、普通なら混乱や混沌しか生まれてはこない。しかし、そこにEmerson流の「正直に自然に」という条件を付すことで、一定の秩序づけがおこなわれているのである。Emersonの言う「正直に自然に」とは、実はEmersonが自分にとって自然だと思える部分のみを採り上げていくのだということを表しているのだ。つまり、内面を信頼するといっても、あくまでもEmersonの思想に合致する、すなわち精神と関連する部分のみを信頼するという一種の規制と取舍選択がおこなわれているわけだ。

Matthiessenが指摘しているように、⁴² Emersonの方法には、20世紀のシュルレアリストたちのオートマチスム（自動書記）などに通じると思われる部分がある。にもかかわらず、混沌とした様相が見られないというのは、明らかに、そこに意識的にであれ、無意識的にであれ何らかの規制がなされた結果であるとみて間違いない。Emersonが精神や内面の神と関連を持つと見なさないものはみな慎重に排除されているのだ。同じように自己を信頼し、自己の内面をのぞきこんだWhitmanが“Song of Myself”などの中に、後にフロイド派の批評家たちの好餌になるほどの無意識の混沌をも描き込んでいるのは全く対照的である。

以上の考察にも明らかだと思うが、Emersonは人間の問題についても、自然について語るときと同様、自分の思想と合致する部分しか見ようとしない。Emersonが人

間について語り、その自己信頼を語るとき、彼の目に見えているのは、つきつめれば、ただ内面にいる神だけである。そうした精神との関連を持たぬ部分は全て切り捨てられている。つまり、自然（＝世界）と同じく、Emersonにとって人間は存在していないのも同然である。存在するのは精神のみなのだ。

Emersonはこのように、人間を精神との関連において神格化するために、逆に人間を徹底的に無化してしまったのだが、このことも、Whitmanが自己および人間を神格化するときに、あくまでも自己をまるごと肯定し、“Divine am I inside and out”⁴³と高らかに言い切ったのとはあまりにも対照的である。同じ超絶主義グループにくぐられ、ともに個人主義を主張しながら、その個人の内容にはなんと大きな違いがあることか。

だからEmersonの思想が「個人主義」的だと述べるときには次のような注釈が必要だ。すなわち、Emersonの思想は、社会や因襲から切り離されている点では個人主義的だが、Emersonが個人を言うのはそこまでであり、その先では個人は無化され、普遍者たる霊の存在があるだけなのだ、と。

こうした、Emersonの人間観は、*Representative Men*において、さらに徹底されているようだ。Emersonにとって偉人とは、万人が共有しているさまざまな属性を、他の人々のよりも純粋に「代表している」(represent)人物のことであり、結局、可能性としては、人間は誰しも偉人でありうるのだということになる。言わば相対的な偉人論なわけだが、問題は、偉人が「個」としては存在できないものだとしてEmersonが考えるところにある。

I find him greater when he can abolish himself and all heroes, by letting in this element of reason, irrespective of persons, this subtilizer and irresistible upward force, into our thought, destroying individualism;...⁴⁴

自分をも含めた英雄を抹殺し、「自我を希薄」⁴⁵にすると要するに“Self-Reliance”でみた自己放棄と同じことである。その自己放棄が徹底されればされるほど、偉人としての価値が高まることになる。結局は、酒本氏が述べるように、「自分を越えた何ものかの中に自己を放棄することで、卓越した偉人であり、……自分を越えた何ものかの意味を〈代表（＝象徴）〉することで、彼らは偉人の名に値いするのである。」⁴⁶

かくして偉人（すなわち人間）もまた、自然と同様に、ある精神的な意味の象徴と化す。自然に対する態度がそうであったように、Emerson は人間をただ精神との結びつきにおいてしか考察しない。人間の肉体もすべては無化されてしまうのだ。

以上の考察に明らかなように、Emerson が何らかの対象に向かうとき、それが自然であれ人間であれ、彼はただそうした対象を精神との関連においてのみ捉え、最終的には全てを精神でおおいつくしてしまうとする。しかも Emerson は、精神がすべてにおいて優越する唯一の実在であるという自らの仮説に合わせ、対象となるものを無理やりねじふせてでも改変し、結果的に無化してしまうところまで行き着くのである。

このような Emerson に、もはやナイーブで楽天的な思想家というレッテルは適すまい。そこには、自己のロマンティックな世界観でもって世界のすべてを説明しつくそうとする貧欲なまでの欲求をもった Emerson がいるのだ。

Notes

テキストには *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (Centenary Edition), 12 vols. (Houghton, Mifflin, Boston: AMS, 1968) を使用した。以下、注にはエッセイ名、巻数、ページ数のみを記す。

1. *Nature*, vol. 1, p. 25.
2. *ibid.*, p. 10.
3. F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (New York: Oxford University Press, 1941), p. 51.
4. *Nature*, p. 50.
5. *ibid.*, p. 49.
6. "Fate", vol. 6, p. 25.
7. 酒本雅之『アメリカ・ルネッサンスの作家たち』(岩波新書, 1974), P.96.
8. 同, p. 97.
9. *Nature*, p. 77.
10. *ibid.*, p. 19.
11. *ibid.*, p. 19.
12. *ibid.*, p. 24.
13. 酒本, p. 88.
14. ブリス・ペリー編 宮田彬訳 『エマソンの日記』(有信堂, 1960), p. 55.
15. *Nature*, pp. 51-2.
16. 田宮正晴「エマソンの超絶主義思想について」明治大学教養論集167, p. 46.
17. 酒本, p. 66.
18. 同, p. 99.
19. Matthiessen, p. 44.
20. 酒本, pp. 70-72.
21. Walt Whitman, *Leaves of Grass* (A Norton Critical Edition) ed. by Scully Bradley and Harold W. Blodgett (New York: W. W. Norton, 1973), p. 53.
22. *ibid.*, p. 97.
23. *ibid.*, p. 86.
24. *ibid.*, p. 65.
25. *ibid.*, p. 51.
26. *ibid.*, p. 364.
27. *ibid.*, p. 157.
28. *ibid.*, p. 150.
29. *ibid.*, p. 151.
30. *ibid.*, p. 154.
31. Matthiessen, p. 44.
32. 『日記』, p. 44.
33. *Nature*, p. 16.
34. Matthiessen, p. 49.
35. *Nature*, p. 23.
36. 『日記』, p. 126.
37. "Self-Reliance", vol. 2, p. 64.
38. See Yvor Winters, *In Defence of Reason* (University of Denver Press, 1937) pp. 262-82., pp. 577-603.
39. "Self-Reliance", vol. 2, p. 50.
40. 酒本, p. 77.
41. "Self-Reliance", vol. 2, pp. 58-9.
42. See *American Renaissance*, p. 59.
43. Whitman, p. 53.
44. *Representative Men*, vol. 4, p. 23.
45. R.W. エマソン『エマソン選集 6』酒本雅之訳 (日本教文社, 1961), p. 251.
46. 同, p. 253.